

サステナブルコンソーシアム北海道 第2回資源利用勉強会 実施報告

2026年2月12日(木)にコンソーシアムが主催する第2回資源利用に関する勉強会を開催しました。前回に引き続き、有識者の方をお招きし、最新のトレンドなどについてご講演いただき、今回も学びある機会となりました。今回は、日本の漁業が直面する大きな社会課題である「漁獲量減少」と「気候変動」に焦点をあて、漁獲量減少の科学的要因や野生魚保全についてご解説いただき、今後のコンソーシアムの取組み検討に有意義なインプットとなりました。

開会ご挨拶

勉強会の開催にあたり、サステナブルコンソーシアム北海道の高橋会長から食料自給率(カロリーベース)が40%を切った現状に対する危機感と食料安全保障の確立の重要性についてお話しいました。また、この問題を解決するには、政府が主導する官民連携が不可欠であり、利害関係を超えて全ての関係者が連携して取り組むことが前提になることを強調されました。

講演①日本の漁獲量減少の要因

北海道大学水産科学研究院松石隆教授に講演を頂きました。松石様からは、水産資源減少の要因について解説頂き、資源減少は乱獲が理由であるという単純な構造ではなく様々な環境要因があることに留意すべきとのご見解を頂きました。その中でも、特に漁業者数の減少と漁獲量の減少について相関がある点について解説頂き、漁業者の増加に向けて、漁業者の収入向上を含めた「誇り」や「生きがい」を高めるための多角的な地域振興策などが重要になる点についてご説明がありました。



北海道大学水産科学研究院教授 松石隆様(オンライン)



北海道大学北極圏研究センター名誉教授 梶山雅秀様

講演②温暖化に伴う日本系サケの行方

北海道大学北極圏研究センター梶山名誉教授からはサケ資源が直面する危機について解説して頂きました。日本のサケは2010年以降急減しており、沿岸の水温上昇による稚魚の生存率低下、オホーツク海の高水温化による生息域縮小を理由としてあげられました。また、孵化放流技術は過去一定の貢献があったが環境変化に脆弱でその効果が薄れていることのご説明があり、河川を国民共有資産として捉えるなど未来からバックキャストした取組みの重要性についてご提言がありました。

意見交換

講演後、参加者全員での意見交換が行われました。北海道における漁業分析のあり方や特定の研究領域では研究者が不足している問題や増殖事業を行っていない河川も水産資源保護法による「保護水面」として野生サケを保護する管理体制の構築など幅広いテーマについて質疑応答が交わされました。



コンソーシアムとしては、引き続き、このような勉強会を継続しながら、会員間の共通認識の醸成と知見向上を進めていきます。今回の勉強会で取り上げられた「リジェネラティブ(再生可能)な水産業の実現と漁業者の所得向上はサステナブルコンソーシアム北海道が解決を目指す課題の一つです。引き続き、コンソーシアムの活動にご理解・ご協力いただきたく存じます。

なお、2026年3月12日に予定されていたシンポジウムは延期致しますので、改めて皆様にご周知いたします。